2023年9月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第560号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

地方紙の出版活動について感じたこと

地域に根差す新聞社として、本紙連載を書籍化したり、近年は、地元の方の自費出版に応えたりするなど地道に取り組んできたと自負しています。

文／デーリー東北新聞社出版部長・青山友子

ご縁とは本当に不思議なものです。

地方・小出版流通センター代表取締役の川上賢一さんに初めてお会いしたのが1992年秋。それから30年以上の時を経て、この「アクセス」に原稿を依頼される日がやってくるとは思いもしませんでした。

少し自己紹介をしますと、2018年3月までの28年間、新聞・出版などマスコミ業界向けの専門紙「文化通信」で記者をしていました。52歳で、これまたさまざまな縁とタイミングが重なってデーリー東北新聞社へUターン転職し、今に至っています。

こうして書くと、出版業界や出版の仕事に明るいと思われるかもしれませんが、実態は全く逆。文化通信時代に担当していたのは「出版業界」ではなく「新聞業界」でした。また、弊社に転職して最初の3年間は出版部に在籍したものの、創刊に携わった地元の中高校生向けのキャリア教育支援誌の取材・編集を主に担当し、“本流”である書籍については、途中から関わった本があるだけ。その後事業部へ異動し、この春、2年ぶりに出版部へ戻ってきたという、何とも中途半端な経歴です。

この巻頭レポートを執筆されてきた方々を改めて拝見すると、私のような者が書くのは非常におこがましい限りです。が、せっかくの機会ですので、あえて外様的視点から、地方紙の出版活動について感じたこと、地方紙の中でもさらに規模の小さい弊社の出版事業について書こうと思います。

出版事業をどう位置付けるのか

私が川上さんに最初にお会いすることになったのは、新聞週間に合わせた特集「活発な地方紙の出版活動」（「文化通信」1992年10月12日付）の取材でした。

ちょうど、「全国新聞社出版協議会」（事務局・株式会社共同通信社）が結成から20年を迎えた年でもあり、新聞と出版の両業界を扱う専門紙としてやってみたいと企画。社内の出版業界担当者に、地方の出版事情についての第一人者として川上さんを紹介してもらいました。

その時の話で忘れられないのが、新聞社は2～3年で人事異動があるから、出版に関する人材が育ちにくい―との指摘です。恥ずかしながら私は「新聞社で異動は当たり前」程度の認識しかなかったのです。

川上さんには、この特集紙面で寄稿もいただき、同様のことを指摘しています。

「新聞販売と出版販売には対照的なところがある。取引条件的に言えば、新聞は買い切り、出版は委託、販売期間は、新聞は即日、出版は長期となる。また、出版は、広告収入は見込めないという経済的差もある。この相違を、新聞人が理解し、善し悪しは別にして、採算に合う出版活動を持続するかどうかは、今でも各社の課題だろう。結局、出版というものを長く経験した人がいる社、人が変わっても、その経験が蓄積、伝達された社が成功し、持続しているように見える」

さらに、バブル崩壊という当時の経済状況を踏まえ、次のような提起もしています。

「地方新聞社の経営主体が出版活動というものを、どのように位置付けるかが問題である。本業のイメージアップのためと位置付けるか、採算のとれる事業として位置付けるか、地域文化確立のための先行投資と位置付けるか、毎日膨大な人と資金を投入して流される取材記事の更なる普及のための記録出版ととらえるかなどいろいろ考えられよう。その複合的形態もある」

「世の変化がきびしく、地方新聞経営もきびしい中で、二〇〇一年に向けた、しっかりとした理念と夢を出版活動についても持つ必要があるだろう」

新聞業界と出版業界。「活字文化」として一緒にくくられることの多い両業界ですが、商品の流通構造は全く異なります。新聞社の出版事業は、新聞社の中に出版社があるようなものです。私自身、編集、営業、宣伝、経理、商品管理と実務を前に右往左往しながら、そのことを痛感する毎日です。

川上さんの指摘・提言は、30年あまり前のものですが、新聞社の経営環境が大激変してしまった今でも、いえ、今だからこそ、改めて耳を傾けるべきではないかと感じています。

浮上した「再販問題」

前述したように、私は新聞業界担当の記者でしたので、出版業界にも関連するテーマとして取材したことがあるのは「再販問題」や「著作権」でしょうか。

とりわけ再販問題は、規制緩和の観点から著作物再販制度の見直しを打ち出した公正取引委員会と、新聞・出版業界が真正面からぶつかったうえに、1990年代から10年あまりにわたっ

て侃々諤々の議論が続きました。覚えている方も多いことと思います。

2001年に公取委が、「再販制度の当面存置」の結論を発表し、再販問題は一応の収束をみましたが、時に出版業界担当記者とも協力しながら進めた取材・記事は、相当な量だったと記憶しています。

その他、東京国際ブックフェア（TIBF）や東京での書店大商談会に出展した地方紙も取材させていただきました。

全国的に通用するテーマや観光資源を生かした出版物がある地方紙が出展するのは、理にかなっていると思いましたが、1回限りの出展に終わった新聞社もありました。遠方からの出展は、コストに見合うだけのメリットがなかったということで、都市圏から離れた地方紙の難しさも感じました。

当時取材させていただいた方の中には、引き続き出版部門で活躍されている方もおり、今年4月の全国新聞社出版協議会春季例会で再会できました。おぼつかない新任部長としては、前職からのご縁は本当にありがたいものです。

山あり谷ありの出版事業

さて、ここからは少し弊社の出版活動について紹介したいと思います。

「デーリー東北」は戦後間もない1945年12月に創刊されました。本社を置く青森県八戸市を中心に、下北半島から岩手県北までを発行エリアとしています。旧南部藩の領地だったところで、「北奥羽（きたおうう）」と言われています。

当欄を執筆するにあたり、改めて社史をめくってみました。

弊社初の出版物は、創刊20周年記念事業の一つとして1965年11月に刊行した『北奥羽の現勢』（B5判・742ページ）でした。定価は2000円。北奥羽地域の市町村の全容を収録した書として、歴史、開発、現勢、回想、人物、企業、名簿の各編で構成。特に、現勢編では49市町村の担当記者が直接取材に出向いて詳述したとあり、社を挙げての大事業だったことがうかがえます。以降、77年まで毎年1冊、“郷土、北奥羽シリーズ”を発刊していきます。

一方、地方紙としては非常にチャレンジングな取り組みもありました。74年に総合雑誌『月刊きたおうう』（B5判・140ページ、定価300円）を創刊したのです。創刊号は5000部。一部を書店に置きましたが、主に弊社と、本紙を扱う新聞販売店で注文を受けて配達。デーリー東北政経懇話会が会員用に買い取ったこともあり、好評のうちに売り切れたそうです。

資料室にあるこの月刊誌の合本を見ると、写真部員によるグラビア、記者ルポ、地元演劇界のカリスマ・小寺隆韶氏の小説、地元文化人による随筆、政治評論、読者の体験記、地元の画家の挿絵など、硬軟織り交ぜた誌面は、実に生き生きしており、古さを感じさせません。しかし残念ながら、収支の悪化により78年3月号（通算48号）で休刊となりました。

山あり谷ありの出版事業ですが、弊社には最初から出版部があったわけではありません。当初は、65年に新設された事業局事業部が担当し、出版部が新設されたのは2年後。出版部門がなくなった年もあり、79年に出版部が再復活してからは先輩たちによって引き継がれてきました。

川上さんの指摘のように、出版部の人事異動が激しかった時期もありますが、地域に根差す新聞社として、本紙連載を書籍化したり、近年は、地元の方の自費出版に応えたりするなど地道に取り組んできたと自負しています。

ただ、弊社の発行エリアの特性から、どうしても本の内容や購買層、販路が限定されがちです。2017年、前任の佐藤実生子（現・文化部長）が「地元だけで売れる本も大事にしつつ、全国の書店にも販売ルートを広げたい。これからはそういう本も作っていく必要がある」と、長年の懸案だった地方・小出版流通センターとの契約を結びました。

『戦国の北奥羽南部氏』
定価2640円（税込）／
ISBN978-4-907034-27-6

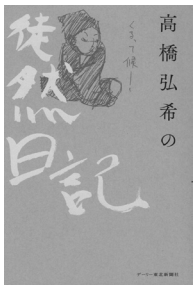
センターと契約したことによる手応えは佐藤自身も感じており、21年6月に刊行した『戦国の北奥羽南部氏』は増刷。今でも途切れることなく注文を受けています。22年9月に刊行した『ポップ担当日記　まちの本屋と書店員の日常』も、地元書店に勤める著者のポプ担さんのSNSを通じた知名度の高さもあって、県外からの引き合いがあります。

『ポップ担当日記―まちの本屋と書店員の日常』
定価1980円（税込）／
ISBN978-4-907034-31-3

芥川賞作家・三浦哲郎氏の『作家生活50年　三浦哲郎の世界』、同じく芥川賞作家・高橋弘希氏の痛快エッセイ『高橋弘希の徒然日記』など、全国の読者に届けたい既刊本もまだまだあります。

『作家生活50年　三浦哲郎の世界』定価1257円（税込）

在籍9年間で弊社出版部の環境をしっかりと整えた前任者のあとというのはプレッシャー以外の何ものでもないのですが、“中途半端な経歴”を強みに変えて、「買ってよかった」「読んでよかった」と思ってもらえる本を一冊でも多く、世に送り出したいと思っております。



『高橋弘希の徒然日記』
定価1540円（税込）／
ISBN978-4-907034-19-1

9月24日に開催される「本のまち八戸ブックフェス」に、今年も出展します。お時間がありましたら、観光がてら、どうぞ遊びにいらっしゃいませんか。

＊

（あおやま・ともこ／デーリー東北新聞社出版部長）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『日本産ゴキブリ全種図鑑』●小松謙之・伊藤ふくお 著

日本で確認されているゴキブリ65種7亜種（2023年3月7日現在）に、ペットとして流通している（！）8種を加え、73種7亜種が記載されている。比類なき昆虫図鑑である。標本写真は詳細を極め、背面や腹面からの写真は言うに及ばず正面から見た顔つきや羽を広げた姿まで、実に細かい部分が確認でき、見慣れていくうちに、子どもの頃眺めていたカブトムシやクワガタムシの図鑑を見ているような気持ちになってくるから不思議である。シルエットによって実際の大きさまでわかるように配慮されている。また、生育環境について、森、草原、洞窟、人家のいずれかがわかるようになっている。私たちにとって親しい（?）のは、人家を生育環境とする連中である。なかでも最も目にする機会が多いのはチャバネゴキブリではないだろうか。コラムの説明によればチャバネゴキブリは「配電盤など暖かい場所を好む」とある。他に人家を生育場所とするものにコワモンゴキブリやクロゴキブリ等がいる。名前は初めて聞くが、写真で見ると確かにこの暑い季節、畳の上をすばやく這いまわっているのを見る機会が多い気がする。あいつらにはこんな名前がついていたのか！と正体を突き止めたような気分になる。ところで本書ではゴキブリ雑学を愉しむ（?）ための興味深いコラムが多く掲載されている。「ゴキブリ」の語源に始まり、雄雌の見分け方や脱皮直後の真っ白なゴキブリの写真等々、読めば誰もが昆虫観察に熱中した子ども時代に帰ること請け合いである（?）（U）

◆4500円・四六判・189頁・**北海道大学出版会**・北海道・202308刊・ISBN9784832914124

『女人短歌 ― 小さなるものの芽生えを、女性から奪うことなかれ』●濱田美枝子 著

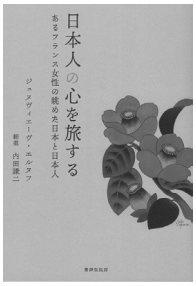
日中戦争から太平洋戦争に及ぶ昭和戦時下と敗戦後とでは時代の価値観は大きく変化した。特に戦時下で女性たちは国策によって銃後を守る母や妻としての役割を担わされ、真情を吐露することなく過ごしてきた。そんな中で女性歌人に焦点を当てると、戦意高揚のために積極的に活動した歌人もいれば、真情の表出とのはざまで揺れ動きながらも自己の内面を詠み続けた歌人もいた。特に後者の歌人たちの思いは強く、言論の統制から解放された戦後間もない1949年4月「女人短歌会」が誕生、同年9月にその季刊歌誌『女人短歌』が発刊された。以後48年間にわたって刊行され、1997年192号を以て終刊したが、その功績は大きい。

結社を越えて女性歌人たちが結集し、経歴に関わりなく、互いの多様性を認め、作品発表の場を意欲的に確保してきた。さらに624冊もの「女人短歌叢書」も刊行。まさに戦後の女性歌人興隆の金字塔を打ち建てた。

かねてから著者が長年研究してきた五島美代子が女性短歌会の支柱となり、草創期の土台を築いた。他の牽引者として、長沢美津、山田あき、生方たつゑ、葛原妙子の経歴を紹介。創刊号の巻頭には女性の横顔を描いた三岸節子の挿絵と共に、4つの文から成る「女人短歌宣言」が掲載されている。男性中心だった当時の歌壇に高らかに宣言。第6号の折口信夫の「女人短歌序説」を全文掲載。『女人短歌』前史から終刊まで、初めての総合研究書。女性歌人の熱い魂が伝わってくる。（Y）

◆2200円・四六判・319頁・**書肆侃侃房**・福岡・202306刊・ISBN9784863855816

『日本人の心を旅する ―あるフランス女性の眺めた日本と日本人』●ジュヌヴィエーヴ・エルヌフ 著 / 内田謙二 訳



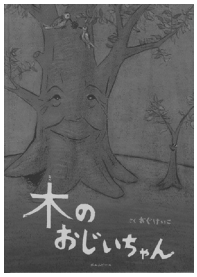
フランス人の著者は、中学生の時に小泉八雲の英訳本を読み、ハリウッド映画でフランス将校が榎本武揚と函館に立て籠ったことを知る。大学で医学、薬学、理学を学んで理学国家博士を取得し、1970年に国際会議で初来日、現在は厚生省付き主任薬事監察官というユニークなキャリアをもつ。ヨーロッパの日本への関心は、ゴッホと江戸時代の浮世絵が知られるように、"ジャポニズム"と呼ばれる芸術、文化への嗜好であった。それに対して、著者は、"ニホニチュード"を提唱する。地理や気候、土壌などの自然環境と、縄文から弥生時代にかけて移入した少なくとも三民族の混成によって生成されたとする遺伝子、それらによって培われた「日本性」に着目してのことである。

この視点から、日本人の脳にある「間」、小柄で長寿を可能にする食生活、自然への畏れと敬い、自然と対話する実践哲学、芸術と和合する職人芸、左右両方の脳を使う日本語、生涯持ち続ける子ども心などに着目し、ノーベル文学賞作家キップリングや社会人類学者レヴィ＝ストロースらの言説も参照し、日本と日本人気質の特異性を浮き上がらせる。日本愛に溢れるが、かといって、他国と優劣性を比較し、無邪気に賛美するものではない。

こう書けばいかにも堅苦しそうだが、温泉卵、原爆で生き残った広島の銀杏の木、隈研吾の建築と身近な話題から始まり、なるほどと気付かされることばかりだ。（飯澤文夫）

◆1600円・四六判・239頁・**書肆侃侃房**・福岡・202307刊・ISBN9784863855786

『木のおじいちゃん』●おぐけいこ 著



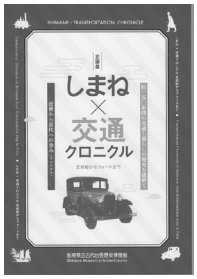
この絵本の語りては山のてっぺんに立っている、まだか細い若木のヨシキ。ヨシキはすぐそばに立つ大木のおじいちゃんから名前をつけてもらった。このおじいちゃんは昔話や、ほかにもいいろいろな話をヨシキに教えてくれる。そして、木のおじいちゃんは、いつでも山の人気者だ。うさぎたちがやってきておうちをつくりたいと言えば、自分の根元の土が掘りやすいと言って場所を与え、キツツキがやってきて家をつくる場所をさがしていると言えば、自分の枝を差し出し、リスたちがやってきておなかがすいたと言えば、木の実を落として、リスたちがそれを口いっぱにほおばるのをうれしそうに眺める。

そして、冬の雪の日、母親からはぐれた小鹿には草の代わりに自分の皮のやわらかいところを食べさせ、冬のあいだじゅう守り続ける。そうやってはる、なつ、あき、ふゆ、そしてまた、はる、なつ、あき、ふゆと季節がめぐるうちに、木のおじいちゃんの体はあなぼこだらけ、どころか皮もはがれてぼろぼろになっている。ヨシキがおじいちゃんに歳を聞いたところなんと555歳とおじいちゃんは答える。ある日ヨシキは、山の動物たちといっしょに木のおじいちゃんの誕生日会をしようと思い立つ…与え、見守り、山の動物たちとともに喜ぶことを常とする木のおじいちゃんの生涯を描いた本作は著者の絵本作家デビュー作である。

第9回絵本出版賞【大人向け絵本部門】優秀賞を受賞。（M）

◆ 1400円・B 5判・32頁・**ポエムピース**・東京・202307刊・ISBN9784908827815

『しまね×交通クロニクル―北前船からフォードまで』●島根県立古代出雲歴史博物館発行



江戸時代には日本海の海運、近代には鉄道も引かれて交通の発達してきた島根県。もちろん寺社参詣に行く人々などが歩いた街道も忘れてはなりません。

本書はそうした島根県の交通の発達に関わる展示品を集めた、島根県立古代出雲歴史博物館の企画展「しまね×交通クロニクル」の図録です。江戸時代の交通の主役はなんといっても船。日本海には本書にも模型の写真がある弁才船が行き来していました。宇龍・鷺浦・美保関など島根半島の町がかつては重要な港町であったことが、収録された資料からもわかります。続いて交通の主役となったのは鉄道。米子方面から伸びてきた山陰線は1923年には島根県の西端である石見益田駅まで開通しました。さらに簸上鉄道・広瀬電気鉄道などの私鉄も生まれていきました。各社の案内チラシには鉄道華やかなりし時代の雰囲気が感じられます。そして交通至便となるとともに旅行が気軽に楽しめる時代になっていきます。近世より参詣者を集めていた出雲大社・一畑薬師などに加えて隠岐も観光地として売り出すようになっていきます。明治時代の松江高等女学校の修学旅行先が「南朝の忠臣」名和長年を祀る名和神社であるのには時代を感じます。往年の寺社参詣案内図、観光パンフレットや駅弁の掛け紙などは専門知識がなくても見ていているだけで楽しいですね。海運・鉄道・旅行を中心にさまざまな貴重な資料が収録されて島根の交通の歴史を辿ることができます。（副隊長）

◆ 1800円・B 5判・127頁・**今井出版**・鳥取・202307刊・ISBN9784866113463

『黒船前夜　新装版―ロシア・アイヌ・日本の三国志』●渡辺京二 著

本書は、2010年2月17日に洋泉社から初版が刊行された『黒船前夜』の新装版となる。今回の新装版刊行は、まことに時宜を得たものであると言える。というのも、ロシアによるウクライナ侵攻以降、世界各国と同様日本もまたロシアとのこれまでの関係を見直さざるを得なくなっているが、そのロシアと日本の関係がいかにして始まりどう展開したのか、黒船来航前夜、日本北辺の地理も日ロ国境もまだ曖昧だったその時代が詳細に描かれているからである。現在の日ロ関係ひいては世界情勢の文脈下に置くならば本書の内容はより鮮明に意味を帯びることになるのである。例えば第一章「はんべごろうの警告」では、一七七一年、シベリアの虜囚だったベニョフスキーなる人物が脱走後日本の阿波に接岸し、長崎出島オランダ商館長宛の手紙を現地役人に託したエピソードが取り上げられている。その手紙は、当時ではありもしないロシアの脅威を捏造したものだった。当時ロシアは日本との交易は望んでいたとしても、「松前とその近辺を占拠する計画」などとこの手紙にあるようなことがあろうはずはなかった。しかしここに、ロシア南進を日本側が憂える北方問題は端を発したのである。また第九章「レザーノフの報復」では、ロシア海軍士官フヴォストフが一八〇六年から翌年に樺太、択捉島を襲撃した事件が取り上げられている。この時幕府軍は交戦意欲もなく敗走した。そして第十章「ゴローヴニンの幽囚」において、後に『日本幽囚記』を書くことになるゴローヴニンの捕縛から解放へ至る経緯と背景が描かれる。（N）

◆ 2200円・四六判・422頁・**弦書房**・福岡・202308刊・ISBN9784863292703

売行良好書

期間：2023 年 7 月 15 日～ 8 月 14 日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『黒船前夜　新装版』2200 円・弦書房　(2)『中村哲　思索と行動　「ペシャワール会報」現地活動報告集成「上」１９８３～２００１』2700 円・忘羊社　(3)『文学する中央線沿線』1700 円・ぶんしん出版　(4)『琉球怪談デラックス』1600 円・ボーダーインク　(5)『海のアイヌの丸木舟』2400 円・寿郎社　(6)『日台万華鏡』1600 円・書肆侃侃房　(7)『障害と人権の総合事典』2700 円・やどかり出版　(8)『野球短歌』1600 円・ナナロク社　(9)『情報の歴史２１』6800 円・編集工学研究所　(10)『あなたのための短歌集』1700 円・ナナロク社　(11)『現代語訳　上井覚兼日記３』2200 円・ヒムカ出版　(12)『つむじ風、ここにあります』1700 円・書肆侃侃房　(13)『「寝た子」はネットで起こされる！？』1500 円・福岡県人権研究所

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『現代語訳　上井覚兼日記３』2200 円・ヒムカ出版　(2)『二つの教会をめぐる石の物語』2000 円・下野新聞社　(3)『障害と人権の総合事典』2700 円・やどかり出版　(4)『サルタ彦大神と竜』2000 円・大元出版　(5)『調査されるという迷惑』1000 円・みずのわ出版　(6)『ボランティアと有償ボランティア』1800 円・弦書房　(7)『少年日本史』3000 円・皇學館大學出版部　(8)『鎌倉の歴史』3000 円・高志書院　(9)『東京の森のカフェ』1300 円・書肆侃侃房　(10)『老いの場所から』1200 円・小澤昔ばなし研究所　(11)『３１センチの約束』1200 円・西日本新聞社　(12)『上宮太子と法隆寺』2778 円・大元出版　(13)『石獅子探訪記』2400 円・ボーダーインク　(14)『北海道いい旅研究室１９』818 円・海豹舎　(15)『蟹工船の記憶』2400 円・桂書房　(16)『出雲散家の芸と大名』2500 円・大元出版　(17)『中国神話史』12000 円・中国書店（集広舎）

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼本年も「Under 35 Architects exhibition 35 歳以下の若手建築家による建築の展覧会」が、大阪駅前・うめきたシップホールにて開催されます。「これからの活躍が期待される 35 歳以下の出展候補者を全国から募り、ひと世代上の建築家である「平沼孝啓」の厳正な審査を経て選出された建築作品の展覧会です。また、その出展作品の中から優秀な作品を選出し、Under 35 Architects exhibition 2023 Gold Medal 賞を授与します。本展は、これからの活躍が期待される若手建築家に発表の機会を与え、日本の建築の可能性を提示し、建築文化の今と未来を知る最高の舞台となるでしょう。」（U-35 フライヤーから）。2023 年 10 月 20 日（金）～ 30 日（月）/ 12:00 ～ 20:00 最終入場 19:30 期間中無休 ※最終日は 16:30 最終入場、 17:00 閉館 / 入場料 ￥1,000 / 大阪駅・中央北口前 うめきたシップホール 〒 530-0011 大阪市北区大深町 4-1 うめきた広場。本展覧会図録【Under 35 Architects exhibition 2023 OPERATION BOOK】（ISBN 978-4-905436-24-9 本体 909 円）は販売中です。

※ 前号の 8 月号ジュンク堂書店池袋店売行良好書リストが 7 月号のものと同じになっていました。たいへん失礼いたしました。本来は以下のようになります。(1)『現代語訳　上井覚兼日記３』ヒムカ出版 /(2)『琉球弧・海辺の生きもの図鑑』南方新社 /(3)『水上バス浅草行き』ナナロク社 /(4)『仁義ある戦い』忘羊社 /(5)『魚毒植物』南方新社 /(6)『近江の土葬・野辺送り』サンライズ出版 /(7)『銭湯』書肆侃侃房 /(8)『サルタ彦大神と竜』大元出版 /(9)『中村哲　思索と行動』忘羊社 /(10)『東松山の地名と歴史　復刻新版』まつやま書房

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方･小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき､hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。